博 士 学 位 論 文

内容の要旨
および
審査の結果の要旨

博甲第１２号

令和４年度（２０２２年度）

京都文教大学

はしがき

本編は、学位規則（昭和２８年４月１日文部科学省令第９号）第８条による公表を目的として、令和４年９月１６日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨、論文審査の結果の要旨を収録したものである

学位記番号に付した甲は、本学学位規則第３条第１項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目　　次

学位記番号	学位の種類	氏名	論文題目	頁
博甲第 12 号	博士(臨床心理学) （京都文教大学）	石田　優香	心理臨床におけるイニシエーションに関する研究	1

氏　　名	石田　優香
学 位 の 種 類	博士（臨床心理学）（京都文教大学）
学 位 記 番 号	博甲第１２号
学位授与年月日	令和４年（２０２２年）９月１６日
学位授与の要件	京都文教大学学位規則第３条第１項の規定による
学 位 論 文 題 目	心理臨床におけるイニシエーションに関する研究
論 文 審 査 委 員	主査　教授　濱野　清志
	副査　教授　名取　琢自
	副査　教授　松田　真理子

論文内容の要旨

本論文は、心理臨床におけるイニシエーションということを見つめ直し、そのありようについて検討したものである。臨床心理学において、イニシエーションという考えは一般的に受け入れられるようになってきている。その反面、イニシエーション概念の多義性から意味合いが拡散しやすい傾向や、イニシエーションの中心的なテーマとしてよく知られている「死と再生」が字義通りに捉えられることで、当事者の体験から離れた一面的な理解に陥る危険性が見られる。心理療法において、イニシエーションの過程が意味を持って動き出すかどうかは、心理臨床家がイニシエーションを、理論的にも体験的にも、いかに固定化させずに、生き生きと理解しているかにかかっていると考えられる。

そこで本論文では、序章にイニシエーションの歴史的変遷の概要を示した上で、河合俊雄（2000）による「没入」と「否定」の概念を援用して、現代的なイニシエーションについて見つめ直すことを試みている。伝統社会のイニシエーションにおける、子どもから大人へ、自然的存在から神話的存在へという、没入から否定へと向かう方向性のものだけでなく、近代的な主体から、こころの内面にある生命に触れるような、否定から没入へと向かうものも、現代的なイニシエーションとして位置づけられるのではないかと考え、検討を進めている。

第１章では、まず文化人類学、宗教学、民俗学、社会学の知見をもとに、イニシエーションの基本的な特徴と、日本における成人式の歴史的変遷について概観している。次に、Freud,S.と Jung,C.G.によるイニシエーション研究を概観し、イニシエーション概念が臨床心理学や心理療法の領域にどのように取り入れられていったのかについて示している。最後に、特に Jung 派の心理療法における、こころの内面をイメージに映し出すことで扱っていこうとするアプローチと、イメージに関わる諸概念について概観している。

第２章では、臨床心理学における先行研究が、心理臨床場面におけるイニシエーションをどのような観点から捉え、考察しているかに着目して、それらを主に、物語性・象徴性の観点、リミナリティの観点、弁証法的動きの観点という３つの観点に分類し、概観している。各々の観点が光を当てているイニシエーションのありようと、その観点の課題となる点を指摘した上で、本論文の位置づけを示している。本論文の各章で採用している、おとぎ話や現代の小説を素材とした物語研究､体験報告例と調査事例を素材とした事例研究、描画を用いた質的調査研究について、方法論と採用した根拠について述べている。

第３章では、女性の伝統的なイニシエーションのありようを明らかにするために、成女式の過程とグリム童話『ホレのおばさん』の分析を行っている。分析を踏まえて、伝統社会のイニシエーションには、社会全体の生命活動を衰退させないために、個人が社会に位置づけられることで大人の女性になる側面と、個人が集合的なものと分かち難く縛りつけられ、コムニタスに没入する側面があったことを指摘している。現代においても、各々のこころの内面を持つ個人が、自分自身と切り離されずに在るためには、あり得べき社会の中での「大人」としてのあり方と、個人化されたコムニタスに見出される生命活動の根本の間を行き来することが、イニシエーションとして必要なのではないかと考察している。

第４章では、現代的な女性のイニシエーションの具体例として、Spiegelman（2003）におけるLisa Sloan氏の体験報告例を検討している。Sloan氏の体験報告例には、イニシエーションの原体験とそこからの決別という相対立する側面が見られ､前者には没入の態度、後者には否定の態度が深く関わっており、両者の弁証法的な動きが、Sloan 氏の世界観に変容と更新をもたらしたことを考察している。近代以降においては、社会の中で役割を持って生きることと、コムニタスの中で生命の原点に触れることの、どちらか一方に固定されるのではなく、２つの世界の間を動き続けることが心理学的に大切なのではないかと考察している。

第５章では、児童文学『怪物はささやく』を分析し、近現代における個人的なイニシエーションの表現形態と体験のされ方について明らかにすることを試みている。分析を踏まえて、前近代の伝統社会における成人のイニシエーションと、近現代のイニシエーションとの異同を、９点にまとめて提示している。

第６章、第７章では、Luthe（1976）が開発した描画技法である「なぐり描き（Mess Painting)」法を用いた質的調査研究、調査事例研究を提示し、否定から没入へと向かう現代的なイニシエーションの中核的な動きを実践的・体験的に捉えることを試みている。

第６章では、「なぐり描き（Mess Painting)」法の先行研究を概観し、技法の特徴を、なぐり描きに取り組むことを通して、自我意識の持っている分節化や明確化の傾向をいわば積極的に緩め、人間の根本としての生命性を活性化させようとするものとして位置づけている。単回の「なぐり描き（Mess Painting)」法を体験するプロセスを質的に検討する調査研究を提示し、否定から没入へと向かう動きにおける描き手の体験について、探索的に検討している。調査結果から、否定から没入へと向かう動きを細やかに見てゆくと、なぐり描きを通して、形態をとらない、イメージ以前のものに触れていくなかでも、イメージを捉え､形象化するという､人間の意識や思考の関与が不可欠であることを考察している。

第７章では、週１回の「なぐり描き（Mess Painting)」法セッションを６週間にわたって継続的に実施した調査事例を検討し、調査事例のプロセスや主体とイメージの関わりに

見られる、現代的なイニシエーションの様相について考察している。調査協力者の語りに見出された、イメージにとどまり、そこに浸っていく様相を、本論文で述べてきた現代的なイニシエーションの契機として捉えている。その契機を通して、イメージと調査協力者の視点との間に相互的・弁証法的な動きが生まれ、自己関係に入っていくことが実現していると考察している。調査事例の後半には、なぐり描きの中に形態が描かれることが増えており、イメージを形象化し、内面化する作業が行われていたと考察している。このような後半のプロセスは、自我意識が望む方向へと向かっているという点で、本論文が示してきた現代的なイニシエーションの契機からは外れている動きとして捉えられ、本調査事例における調査協力者にとって大切な作業だったのではないかと考察している。

第８章では、本論文の成果を提示し、総合的な考察を行っている。イニシエーションの根幹にある不可逆性とは何かについて、Lisa Sloan氏の体験報告例とグリム童話『星の銀貨』から例を示して考察している。イニシエーションの根幹にある不可逆性は、イニシエーションの体験から本当に何かを得たということが、魂の底に内在化されることに依るものであり、そのことを当事者の体験に即して語った場合、「自分を根底で支える光への信頼」と表現することができるのではないかと論じている。最後に、本論文の限界と今後の課題として、心理療法の自験例をもとに考察を深めること、発達的な観点からの更なる検討が必要であること等を含めた７点を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心理臨床におけるイニシエーションについて、文献研究による概念整理を行うとともに、物語分析、なぐり描き体験の質的調査研究、現代女性のイニシエーション体験、なぐり描き体験の事例研究を駆使して多角的検討を試みた研究である。

本論文は序章と8章で構成されている。序章ではイニシエーションの歴史的変遷の概要を示し、河合俊雄（2000）による「没入」「否定」概念を援用して現代的なイニシエーションの特徴を論じている。伝統社会では、子どもから大人へ、自然的存在から神話的存在へ、「没入」から「否定」への方向性が認められるが、近代的な主体には、「否定」が先行した上で内面にあらためて触れる「没入」への方向性もありうることが論じられた。

第１章では、文化人類学、宗教学、民俗学、社会学で論じられるイニシエーションの基本的な特徴と、日本における成人式の歴史的変遷が概観され、Freud,S.とJung,C.G.によるイニシエーション研究、臨床心理学・心理療法領域でのイニシエーションの受け取り方の概要が示されている。第２章では心理臨床場面におけるイニシエーションの主な捉え方を物語性・象徴性の観点、リミナリティの観点、弁証法的動きの観点の三種に整理し、本研究で採用した物語研究、体験報告例・調査事例の事例研究、描画の質的調査研究の方法論が解説されている。第３章では、女性の伝統的なイニシエーションを取り上げ、成女式の過程と童話『ホレのおばさん』の分析を行い、個人が社会的に成人女性になる側面と、集合的なものに結びつけられコムニタスに没入する側面が提示された。現代では社会の「大人」のあり方と、個人化されたコムニタス、生命活動の根本の両者を行き来する必要性が論じられている。第４章では、現代女性のイニシエーション例、Spiegelman（2003）記載のLisa Sloan氏の体験報告例が検討された。事例ではイニシエーション原体験とそこからの決別がなされており、それぞれ「没入」と「否定」の態度と関わりが深く、両者の弁証法的な動きが世界観に変容と更新をもたらしたことが論じられた。第５章では、児童文学『怪物はささやく』を分析し、前近代・伝統社会の成人イニシエーションと近現代のイニシエーションが9項目の視点から比較されている。第６章ではLuthe（1976）の「なぐり描き（Mess Painting）」法の先行研究と技法の特徴が解説された後、単回の「なぐり描き（Mess Painting）」法体験の質的調査研究が報告され、「否定」から「没入」へ向かう動きと描き手の体験について探索的に検討された。なぐり描きで形態をとらない、イメージ以前のものに触れていくなかでも、イメージを捉え、形象化する意識や思考の関与が不可欠であることが考察された。第７章では、週1回・６週連続の「なぐり描き（Mess Painting）」法セッションの調査事例が示され、表現されたイメージと調査協力者の視点との間に相互的・弁証法的な動きが生まれ、自己関係に入っていく例、継続回後半に形態の描写が増加した例が示され、自我意識の働きの視点から考察された。第８章では、本論文の成果の集約および総合的な考察がなされ、イニシエーション体験から真に何かが得られ、内在化された場合のイメージの例が示された。本論文の限界と課題として、著者自身の心理療法事例による深化、発達的な観点からの検討の可能性など、7項目が提示されている。

本論文は、心理臨床におけるイニシエーションの意義と様相について、現代の状況を的

確に捕捉すべく、河合俊雄の「没入」と「否定」の考え方を援用して比較・考察を行ったものである。文献研究、実証的研究、事例研究(制作事例、体験報告例)の各側面からのアプローチがなされており、新たな視点からの概念整理とモデル化がなされている。心理臨床事例を通しての更なる検証と探究が期待される基礎研究として、充分な成果を収めているとみなしうる。したがって、本論文が博士論文の基準を充分に満たす論文であることが認められた。

以上

博士学位論文　内容の要旨及び審査結果の要旨　博甲第１２号

令和４年（２０２２）１０月１日発行

編集・発行　京都文教大学大学院臨床心理学研究科

〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足 80

TEL　0774-25-2426　FAX　0774-25-2498